
天剣を持つ少年 第二部

康頬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天剣を持つ少年 第二部

【NZコード】

N3728Y

【作者名】

康頼

【あらすじ】

この小説は天剣を持つ少年の続編です。

本当は分けるつもりはなかったのですが、向こうは全体を修正加筆しているため、こう言つ措置を取らせていただきました。

第一話 高町家にて 前篇

とある日曜日。

久しぶり海鳴の大地に降り立つたレイフォンは、久しぶりの帰宅に笑みをこぼしていたはやてとともに、八神家を出た。

「いやー、アースラに乗れた時は興奮してもつたけど、やつぱりこうこう太陽の下のアスファルトや土の上の方が落ち着くな

「確かにそうだね、なんか足が宙に浮いてるって感じで落ち着かな
かつたしね」

車椅子に乗るはやてをレイフォンはゆっくりと押しながら答える。
先の事件の取り調べで、アースラ内に缶詰状態だったため、こうし
て外に出るのは三日ぶりになる。

「そりなん? レイ君はいつも通りふてぶてしそうに寝てたから、
そんなん気にしてないと思つたわ」

「それは僕も同感だね。はやてだつて食堂でおかわりとかしてた
から」

「むり、なんか私が食い意地を張つてるような言い方やな

口元を細めて口をぷくつと膨らまし、不機嫌です、という表情のは
やてに、レイフォンは思わず口元を緩めてしまつ。

はやてのこの表情を守るためにレイフォンは剣を手に取つたような

ものだ。

それ故に、力を振るい、様々な人達にも迷惑を掛けたレイフロンだつたが、結果としてはやてとこいつして何でもないよう話ができることが嬉しかった。

「そりか？ でも確かにやてよりは、ヴィータの方が食い意地を張つてた気がするね」

「レイ君、あとで、ヴィータに殴られるといいんだけやつ？」

はやての「飯の方がおいしいと、文句も言いつつもきつちりと」飯を食べ、食後のアイスまで頂いていたヴィータは、現在アースラ内で治療の最中である。

人よりも優れた回復能力を持つヴィータだったが、あの戦闘でのダメージは大きかったようで、当分安静にしておかなければならない。それは同じくベットの住人になっているシャマルも同様で、今頃は付き添い兼事情聴取を受けているシグナムとザフィーラと共に暇を持て成しているだろう。

レイフロンも闇の書に呑まれたことやリインフォースのことなど話すことが色々とあるが、それは後日ということになり、現在はやてと共に、とある場所へと向かっていた。

そこは、はやてに新しくできた友達の家であり、はやて自身も客として何度も足を運んだ場所もある。

喫茶『翠屋』。

知る人ぞ知る、隠れ名店で特にシュークリームが絶品らしい。何時だつたかはやでがシュークリームを買つてきたことがあり、そのシュークリームは甘いものが得意ではないレイフロンでも美味し

く頂けるモードのモノであった。

「ヴィータには、悪い」としたかな?」

「まあ、でもドクターストップ掛かってるからなー」

もし、お土産を貰つて貰ふと言わなければ、ずっと機嫌の悪いまま
だつただらう。

だが、その一言で機嫌を直すのがヴィータらしい。

他にもヴィータ以外にも、甘いもの好きのコンディイヤエイミィ、シ
ヤマルにシグナム、そしてレイフォン以上に甘いものが苦手なクロ
ノからも頼まれるほどものであつた。

恐るべし翠屋である。

「けど、私も楽しみやなー。勿論シュークリームもやけど、なの
はちゃんの家やからな」

昨日は楽しみで眠れなかつたと、七時間眠つたはやても笑みを浮か
べたままで、その笑顔にレイフォンもなのはの家に期待感を抱いて
いた。

だが、レイフォンは後に後悔するだらう。
あの時引き返しておけばよかつた、と。

? • ? • ? • ?

「いんちかわー

翠屋に辿りつき店の扉を開くと、女性はHプロン姿の女性がいた。

女性は、レイフォン達のことを確認すると笑みを浮かべる。

「いんちかわ、貴方達がなのはが言つてこたはやでちやんとレイフォン君?」

「はい、八神はやつて言います」

「へ、レイフォン・アルセイフドー

緊張氣味に挨拶をするはやで達に、女性は回じよつに頭を下げる。

「なのはがお世話になつてこます

「えつと……なのはちやんのお姉さんですか?」

なのはに似てこる」とから血縁の者だつと想い尋ねてみると、女性は一瞬きよとした様子でこひらを見ると嬉しそうに顔を染め

る。

「あ、お世辞がつまこね。お姉さんじゃなくてお母さんです」

「お母さん？」

その言葉にはやとレイフオノは思わず顔を見合せ、後ろに振り向こうとしたと話し始める。

「お、お母さんなんや……お姉さんかと思つたわ」

「へ、うん。僕もわづ思つた」

なのはからば、なのは自身は末っ子で上には兄と姉がいると聞かされていた。

だが田の前の女性は、三児の子を持つ母には見えなくて、十代と二つとも納得できるのではないかとこづまび若々しさがあった。

「どうかしたの？」

「い、いえ綺麗なお母さんで羨ましいなって」

「右に回りでや」

驚く一人を余所に、入口のベルにより来客が来たことに気付いたのだろうドタドタと足音を立てて現れたなのはが首を傾げる。

「どうしたの？ 一人とも」

「え、女性として羨ましいなと」

「故郷の人を思い出したよ」

まだ九才の子供とはいえた同じ女性として、三児の母とも思えない桃子の若々しさは、はやてにとつて羨ましいものであつたし、隣のレイフօンはグレンダンにいる女王陛下のことを思い出していた。

「えつと……とつあえず行こつか?」

そんな一人になのはは首を傾げるしかなく、とりあえずお密様であるはやて達をいつまでも立たせるわけには行かないので家中へと向かい入れた。

カウンターで相変わらず微笑んでいる桃子に頭を下げる、レイフօンはそのままはやてを背負い、階段を上ろうとしているなのはの後を追つ。

「レイフօン君つて凄いね、はやてちゃんを背負つて階段を上るなんて」

もし、なのはがはやてを背負つとするのなら、ほんの数秒で崩れ落ちてしまうだろ?。

目の前のレイフօンは、自然体のままで、なのはの方を見て首傾げていた。

しかし、背負われていたはやては目を細めるとくちづきと口を開く。

「……それはなのはちゃん。私が、重いって言いたいんか?」

「ち、違つよつ!… 私だったら軽くて可愛いはやてちゃんを背負つて階段を上るなんて絶対にできないからつ…」

はやてから感じる圧迫感に自身の発言の拙さに気付いたのはは慌てて否定すると、その様子を見ていたレイフォンが助け船を出す。

「んー、一応鍛えているからね」

剣を纏い、天剣を振るい、巨大な汚染獸を屠るレイフォンにとつて九歳の少女を背負うくらい簡単な事だ。

その言葉に、戦っていた時のレイフォンのことを思い出しているのだろうか、遠い目をしたなのはが納得した様子で頷いた。

「そうなんだ。 やっぱり武術している人つてすいんだね」

うとうんと納得しているなのはの後方でドアが開き、そこからなのはの友達であるアリサが顔を少し出す。

「ちよつと、なのは。立ち話なんてしてないで、部屋に入つてきなさいよ。 皆待っているんだからね」

「あ、ごめんねアリサちゃん」

アリサの指摘通り、いつまでも廊下で立ち話しているのわけにもいかない。

はやてに至つては、レイフォンに背負われている状態なのだから早く降ろしてもらいたかった。

なのはに続くよつにレイフォン達も部屋に入るとそこには、なのはの友達のすずかとフェイドの二人がテーブルを囲んで座つていた。テーブルの上を、ジュースの入つたグラスと喫茶店で並べていたものと同じケーキに手作りのクッキーが所狭しと並べられていた。

「すずかちゃん」、フロイトちゃん、じゅりりちゃん

「じゅりりちゃん、はやて」

「うそ、はやてちゃん、お久しぶり……って程じゃないよね？」

レイフォンに背負われたままの体勢で、はやては片手を上げて挨拶すると、すずかは嬉しそうに微笑みながら答えた。

「もうやね、けど私的には一年近く会ってない気がするわ。といふでフロイトちゃんなんかその格好可愛いな~、人形さんみたいや次に田にはいったのが、すずかの隣にいたフロイトであり、その私服姿だった。

すずかとアリサと違い、私服姿のフロイトを見たことがないはやてには新鮮そのもので徐々にテンションが高まっていく。

そんなはやての視線に照れたように、そして若干顔を赤らめさせたフロイトが口を開く。

「あ、あらがとう、これリンクロンティさんを選んでもらつたの……」

「ううなん？ うつきりクロノ君に趣味かと思つたわ

怯えるフロイトに気付いたはやては、自身の理性を働かせ踏みとどまると思わず思つたことを口にする。

「黒いから？」

「正解、なのはちゃん」

なのはの言った通り、フロイトの私服はバリアジャケットと同様に黒を基調とした作りになつており、少々大人びた感じになつていて、それが一層彼女の可憐さを引き立てていた。

「あんたらくだらないこと言つてないで、さつさと座りなさいよ。あとはやで、私はまだなんだけ?」

「うん、アリサちゃんは、私の中の芸人魂が騒いだからあえてスルしてみました」

キリがないと判断したのか、強引に座らそうとするアリサに、はやはやはレイフオンの背から降ろしてもらつと、そのまま下に敷かれたクッションに腰を下ろす。

「頭の中は相変わらずね。 所で芸人魂つて何よ?」

「うーん、もう少し勢いのある突つ込みを期待してたんやけどな」

「はいはい」

本当にどうでもよとさうにアリサは呟くと、そのままクッションに腰を下ろすと、一人立つてこるレイフオンにクッションを手渡した。

「ところで、貴方も坐つたと座りなさいよ。 たしか、レイフオン……だったわよね?」

「え、うん。 えつとアリサちゃん?」

手渡されたクッションを握りしめながら、レイフオンは恐る恐る初

対面でもあるアリサの名を口にする。

そんなレイフロンに対してもアリサは眉を顰めるが、そのまま呆れた
ように溜め息をつく。

「アリサでいいわよ。 貴方の方が年上なんだしね」

「おお、アリサちゃんが下したつ……！」

「ハハハハハハ……！」

「ヤニヤと笑うはやてに対し、アリサは顔を真っ赤に染めて怒鳴る
姿を見て、レイフロンは苦笑いをしていると、隣に誰かが座った気
配を感じた。

「レイフロンさん、初めまして円村すずかです」

振りかえた先には、ピンと伸びた背筋のまま頭を下げるすずかの姿
であつた。

そんな彼女にレイフロンは慌てて頭を下げる。

「あ、初めまして、レイフロン・アルセイフです。 はやてから
時々話を聞かせてもらっています」

アリサとは違い、すずかの名前には、レイフロンも何度か耳にした
ことがある。

確かに、図書館で出会つた友達で、シャマルとはやてが嬉しそうに話
していたのを覚えている。

それにレイフロンは知らなかつたが八神家にも泊りに来ていたみたい
でその際にシグナムやザフィーラ達とも何度か会つていたらしい。

「そうなんですか？ 私もレイフォン君とのことはやめてやんから聞いてますよ」

「そうなんだ……えっと僕のことは呼び捨てでいいよ」

さん付けで呼ばれるのは好きじゃないと呟つてみると、すずかは「じゃ、レイフォン君でいいかな？」と呟つて笑い返した。そんな一人の姿に、いつの間にか蚊帳の外と化したアリサが面白くなさそうに呟く。

「なんか、私とすずかじゃ対応が違う気がするんだけど」

「それはすずかちゃんとアリサちゃんの差やね」

「はやては黙れ」

はやてとアリサの掛け合いを隣で聞いていたなのはが、片手をしつかりと上げて笑顔でレイフォンに話しかける。

「レイフォン君つー、私はなのはでこりつー」

「あ、うん……」

押しの強いなのはの言葉に、押されるようにレイフォンは承諾するし、そんな彼女に習つてか、右手側にいたフェイトも感る感る手を上げて話しかけてきた。

「レイフォン、私もフェイトでこよ」

「あ、はい……」

上田遣いのフロイトの頼みを、レイフォンには断る悪氣もなく承諾するしかなかつた。

こつして女だらけの女子会にレイフォンは屈心地悪ひついに参加するのだった。

第一話 壱町家にて 中編

穴があつたら入りたい。

それが今のレイフォンの切実な願いである。

「フライトをやつて、肌奇麗やね」

「えつ、やつそつかな?」

「うふ、ほれ!」なんかも」

「ひやあつ……あん……」

「うふうふ、はやひつ……フライトは嫌がつてゐじやないのよつ
……」

「えー、これつて一般的なスキンシップだけやつた?」

「んなわけあるかつ……」

「まあまあ、アリサちやん。 いれつてはやひつやんの病氣みたい
なものだし」

「……すずか、カラッと酷こじらねのう」

「むへ、やんなすずかちやんにはセクハラ大王からのお仕置めり

「わわわー、はやひつやん、へすぐつたこよ……」

「くふかくんか……やつぱりすすかちやんの髪つていい匂いがするわ~」

「なのはつーー 变態がいるわつーー すぐこじシャマルさんこでも引き取つてもらこなれこつーー」

「ふふふ、シャマルは今は遠こ空の向こへ……アリサちゃん覚悟つーー」

「つかやあつーー つて何処触つて……」

「ふともも~柔らかいわ~」

「アリサちゃんつーー」

「馬鹿……私達に構わず逃げなさいーー」

「人の心配する暇ないよ、なのはりやん」

「みやあつーー」

「ふふふ……あれ? なんかなのはちゃん力チカチするわ

「ひどいーー」

スーパーはやてタイム。

長い間抑えていた欲求が爆発したようで、親友達にセクハラをし続けるはやてに軽く後ずさりしながら、天井辺りを眺めていた。

先程まで甘いお菓子を食べながらの女の子によるお話タイムにも馴染むことができなかつたレイフォンだったが、現在はこの空間から逃げなくなつてきた。

寧ろ逃げるといつのは良い考えかもしれない。

せつかくはやてが友達と仲良く？しているのだから邪魔するのも悪いだろう。

今なら抜け出すことも簡単だらうと、レイフォンはある意味自己防衛に走るとそのままゅっくりと立ち上がり、そのまま忍び足で扉の前まで歩き、そしてノブに手を掛けた。

「レイフォン？」

「どうやらセリフ簡單にいかないモノで、扉を開こうとしたレイフォンに、背後からフェイトの声が掛かる。

恐る恐る振り返った先には、はやてから逃れようと部屋の隅に隠れていたフェイトが助けを求める子犬のような目でこちらを見つめていた。

その眼差しに罪悪感を感じたレイフォンは、右手をドアノブから離す。

そして、そのまま部屋の真ん中でアリサに絡みついていたはやてを止めようとくつと歩き出した。

「わいせ、レイ君も一緒に遊びや？ 男の子やからこなんなん興味あるだろ？」

「いあん、トイレ行つてくろよ」

説得を一秒で諦めて、そのまま当初の予定通り逃亡を図ることになったレイフォンは速やかに部屋の扉を開けた。

フェイトの悲鳴を聞きながら、一階に下りてきたレイフォンはとりあえずどうするか考え始める。

流石にこのまま高町家を後にするのは、薄情すぎるだらうから却下として、翠屋の方に行くのも仕事の邪魔だらう。

何より他人の家でうるうるするのは行儀が悪いし、失礼だ。とりあえず縁側にでも出て、外の空気を吸って気分転換でもしよう、と考えたレイフォンの耳に何かが弾けたような打撃音が聞こえた。

その音に釣られるよし、レイフォンは歩き始めて母屋を出ると、目の前に現れたのは道場だった。

音がこの道場から聞こえることを確認したレイフォンは、閉め切られた引き戸を開き、道場の中を覗いてみる。

そこは外の世界とは別世界のようで、静寂に包まれた道場の中心に佇む白い胴着に紺色の袴の女性。

女性の両手には一本の木刀が握られ、何かを待つよしに両手を開じていた。

テレビで見た聖職者の祈りにも似た女性の姿に、思わずレイフォンも魅入られてしまつ。

そして、女性は動いた。

板間の上を音を立てずに流れるような足捌きから、風を切り裂く緩急のある剣閃、

それら全てが見る者を魅了する剣舞に、レイフォンも思わず感嘆の声を上げそつになる。

故郷のグレンダンには化物のよつな武芸者はいるが、女性のよつな美しい舞芸^{ぶげい}を行うことができる人間はそうはないだろ。リンクテンスやサヴァーリスはこうこうことには無縁だし、唯一似合いそうのがカナリスくらいなのだが、彼女の剣舞といつもの見たことはなかつた。

何よりレイフォン達は剣技といつ武芸である。

目の前の女性のよつな純粹な体術による武芸とは別物だろ。

「そこ」の貴方隠れてないで出てきたら？

レイフォンの気配に気づいたのだろう、じゅりに視線を送る女性にレイフォンは引き戻^かを開けて道場の中へと踏み出す。

「その……すみません、鍛練中にお邪魔して」

「別にいいよ。 静かに見ててくれたから邪魔になんてなつていないし、ところで君はなのはの友達？」

道場の壁に掛けてあつたタオルを取り、汗拭く女性の質問にレイフォンは思わず考へてしまつ。

厳密にはやての友達のよつな気がするが、なのはの態度から推測するにレイフォンは友達になつてゐるのだろう。

レイフォン自身それを否定する理由はないので素直に頷くことになった。

「はい。 最近、友達になりました」

「そうなんだ。 けど珍しいね、なのはが男の子を家に招待するな

んで「

「やつなんですか？」

「うそ。私の知ってる限りないこと思つよ。所で何せどうしてここにいるのかな？……えつと」

首を傾げる女性の姿を見て、レイフォンは名乗つていなかつたことを思い出した。

「レイフォンです。レイフォン・アルセイフ

「私は高町美由希、なのはのお姉さんよ」

白川紹介とともに差し出された手をレイフォンは握り返すと、なのは姉らしく女性。美由希は、何かに納得したように頻りに頷き始める。

「やつぱりレイフォン君つて、武術……剣術とかやつてているでしょ？」

「やつですけど、どうしてわかつたんですか？」

「手にタガがあるからね。私もあるからやつかな？って思ったの

そう言われて、レイフォンも美由希の手を握り返してみると、彼女の掌には剣を握るものにできる特有のタガがいくつかできていた。

「本当ですね」

「でしょ？ 私は恭ちゃん… ああ兄の」とね、あとお父さんがやつてゐる剣術教えてもらつてゐるんだけど、レイフォン君は誰に教えてもらつてゐるの」

「僕は、とうやく養父に教えてもらいました」

だが、それは過去のことである。

天剣になつたあの時から、レイフォンは養父テルクから教えてもらつた武芸・サイハイ・デン刀争術を捨てたのだ。

「もうなんだ。 でも凄いね」

「えつ」

感心したように美由紀がレイフォンの頭を撫でると、レイフォンは思わず首を傾げてしまつ。

「だつて、本当に小さい頃から教えてもらつてたんでしょう？」

「はい、七歳くらいたつたと思ひます」

実際にはもう少し早かつたかもしれない。

七歳どころのは、本格的にサイハイ・デン刀争術を学び始めた時の年齢である。

それに武芸者と生まれたなら、七歳から武芸を学ぶのはおかしくないことだが、この世界では少しずれていくようだ。

「なのはより小さい頃からか……私なんてその頃何してたつてつけ？」

呆れたのか感心したのか溜め息をつく美由希に、レイフォンは苦笑いするしかなかった。

「でも、レイフォン君って剣術が好きなんだね

「え？」

不意を突かれたようにレイフォンは呆けたように声を上げると、美由希は何でもないよう答える。

「えっ、だつて普通、そんなに一生懸命にはなれないでしょ？あ、それともお父さんが好きなのかな？」

「…はい、そうですね。養父さんも剣術も好きです

ほんの少し前のレイフォンなら武芸を好きとは言えなかつたかもしれない。

小さい頃から必死になつて修行したこと、より多くのお金を稼ぐためだつた。

しかし、はやてと出会い、色々な事を知り、剣を振るつて気付いた。彼女を守れた武芸を誇つに思えたし、離れて気付いた武芸を賣い始めて頃の気持ち。

けじめとしてサイハーテン刀争術を使うことができないかもしれないが、それでも不器用な養父やデルクから学んだ武芸のことは大切に思つている。

レイフォンの返答に嬉しそうに微笑んでいた美由紀だが、ふとした疑問を思い出す。

「とにかく、レイフォン君はどうしてここにいるの？　なのはの部屋で遊んでるんじゃないなかつたってけ？」

レイフォンに興味が惹かれ、ズレた話をしていた美由紀だったが、ふと当初の疑問を思い出す。

「その……話についていけなくて」

「……あつそつか。　男の子だもんね。　で、外に出たら道場から物音がしてこっちに来たって感じかな」

「はい、大体そんな感じです」

疲れたように溜め息をつくレイフォンの姿を見て、美由希は思わずその心境に同意してしまう。

異性だけしかいない部屋に放り込まれたのが、自分であれば五分も持たずに退室する自分の姿が想像できるからだ。だからだらうか、不憫なレイフォンに美由希は助け舟を出すことにした。

「そつか……それなら私と一緒に練習しない？」

「えつ……でもお邪魔なんじゃ？」

「いいのいいの。　いつもつるさい恭ちゃんは、忍さんの所にいつてるしね」

はい、と言いながら美由希に投げ渡された木刀を受け取ると、レイフォンは諦めたように溜め息をつき木刀を構える。

「えっと、じゃあ、わかりました」

軽く息を吐き、田を瞑つてレイフォンは脳裏に先程、美由希が行つた剣舞を思い描く。

レイフォンにはあそこまでできる気がなかつたが、やるならアレをやつてみたいと思い、足を流れるように滑らす。
身体に巡らせる剣をできるだけ最小限にして、魅せられた剣舞を模^まね^ね倣^{まね}ていく。

思考が研ぎ澄まされ、剣舞の世界に入り込んだレイフォンの姿は、先程の美由希の動きに瓜二つで、唯一の違いと言えば、彼女は二刀流で、レイフォンは木刀を片手に持つていてことだった。

故に、それを見ていた美由紀への衝撃は大きかつた。
嫉妬、羨望、尊敬、歡喜、様々な感情が入り乱れる内心を抑え、美由希は剣舞を終えたレイフォンに話しかけた。

「ねえ、レイフォン君って何者？」

「え、何者って言われても……」

美由希の問いかけにレイフォンは、どう答えたらいいのか分からずにいると、興奮気味に頬を染めた美由紀が詰め寄つてくる。

「だつて普通その歳でそんなことはできないよ。母屋にいるのは達の気配に気付かないかもしれないけど、道場の前にいたレイフォン君に気付かないほど未熟じゃないよ」

「えっと……」

いつもの癖で殺剣を使つたのが拙かつたのか、それとも美由紀の剣舞を真似たのがいけなかつたのか。

武芸者という存在をリンクティからしゃべることを禁じられてゐる。そのため、どう説明するべきかと迷うレイフォンを見て、美由希は一つの答えを出す。

「む、もしかして、なのはが言つてた魔法使いつて奴なの？」

ほんの昨日なのはから聞かされた魔法という存在、そしてなのは本人も魔法使いという事實を聞き、この日の前の少年も同様なのではないかと美由紀は考へたのである。

その誤解は、何も思いつかなかつたレイフォンにとつて都合がよかつた。

「えつ、そうですね。 そんな感じです」

実際は全く違うのだが、取り合えずレイフォンは美由希の勘違いに乗つかることにした、というよりもこれ以上の説明をレイフォンは思いつかなかつた。

「へえ……魔法つてすごいだね。 私も魔法を使えないのかな？」

「魔法は才能がないと使えませんよ……確か」

魔導師ではないレイフォンにとつて、魔法知識は皆無に等しい。それに自信はなく、誰かから聞いたことを言つてはいるだけだが、一般人の美由希には気付かれなかつたようだ。

「そうなんだ。 まあ、この年で魔法少女を名乗るのは痛すぎると

うね。 ただ空を飛んでみたかったな

「空ですか？」

「うん、 なのはが嬉しそうに話していたからね」

そう言って笑う美由希の表情は、なのはそっくりでやはり姉妹なのだとレイフォンは実感しつつ、空を飛んだ時のことを考える。武芸者になつた時から空は自由に飛んでいたが、あれは飛んでいたのではなく跳んでいたというのが正しい気がする。

リンインフォースとの融合により、リンクアーコアを得られたが、魔法の力では飛ぶことはできない。

そう考えると、レイフォンもなんだか空を飛んでみたくなった。

誰かに教えてもらひべきかとレイフォンは考えていると、田の前にいた美由紀がレイフォンの肩を叩いた。

「さて、 レイフォン君、 次は私と模擬戦してみない？」

「と、 唐突ですね」

先程まで空の話とか、魔法の話をしていたのに、いつの間にか模擬戦の話になつている。

誰もが首を傾げる唐突さにレイフォンは思わず苦笑を吐いつとするが、満面の笑みの美由希の手により遮られる。

「いや、 戦いが大好きとかじゃないけど、 やっぱりレイフォン君みたいに強い子を見ると剣を交えてみたいとか思わない？」

「思いませんし、 その発言は戦いが大好きな人が言うことです」

同じような事をシグナムやサヴァーリスも言っていた気がするし、常人なら絶対に言わない発言だ。

そんなレイフォンの返答に不満そうに頬を膨らませた美由紀だったが、突然笑みを浮かべてレイフォンの両肩を掴む。

その笑みは面白いことを思ついたはやての表情に酷似しており、レイフォンにとつて嫌な予感しかさせない笑みだった。

「ええ～～、そうだレイフォン君が勝つたら私がなんでも言つて聞いてあげるよ」

「興味あつません」

片田を瞑り微笑む美由希の発言をレイフォンはぱつぱつと切り捨てる。

「ええ～～男の子でしょ？　あ、それともフロイトちゃんやなのはが好みとか？」

「違います」

「それとも、アリサちゃん？　すずかちゃん？　それともやつぱりはやてちゃん？」

「いいかげん黙つてください～～」

しつこくからかつてくる美由希に対し、レイフォンはその口を塞がにかかる。

普段の美由希なら、簡単にレイフォンをいなすことができただろうが、今立っている場所が拙かつた。

そこは先程まで美由希が剣を振るつて汗を流していた場所であり、必然的に道場の板間には汗が落ちていた。

つまりは、からかうことに集中していた美由紀の足を滑らす原因となる。

「きやあつー！」

「うわっ

足を滑らせた美由希と揉み合ひ形でレイフォンも倒れしていく。

「いたたたつ……」

「す、すみません」

美由希の顔が鼻の先にあることに気付いたレイフォンは思わず身体をのけぞらうとするが、美由希の手や足に絡まり思つように動かせなかつた。

「ううん、大丈夫だよ。 それより上から」

レイフォンに覆いかぶさられる形で倒れた美由紀がレイフォンに話しかけよつとした瞬間、頭上から話しかけられた。

「何をしている」

「「えつ?」」

レイフォンと美由紀は思わず見上げる形で振りかえると、そこには一人の男がいた。

高町 恭也。

高町家長男にして妹思いなお兄さんがそこにはいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3728y/>

天剣を持つ少年 第二部

2011年11月21日14時31分発行